國學院大學学術情報リポジトリ

2016年度のトピック8 出張報告 Third ISA Forum of Sociology(国際社会学会第3回社会学フォーラム)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 平藤, 喜久子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001912

出張報告
Third ISA Forum of Sociology
（国際社会学会第３回社会学フォーラム）

International Sociological Association（国際社会学会、以下ISAと表記）は、社会学の国際学会としては世界最大の規模のものである。世界社会学会議は四年に一度の開催で、前回は2014年に横浜で開催され6087名もの参加者が国内外から参加している。その四年に一度の世界会議の間に若干縮小した規模の学術大会としてForum of Sociologyが開催されている。

2016年にはその第３回のForum of Sociologyがウィーン大学を会場に開催された。縮小といっても4000名を超す参加者が集い、一週間にわたって会議が開催された。

（ウィーン大学正面）

国際社会学会は、53ある研究分野別のResearch Committee（RC）のうちのどれかに所属して研究発表を行う仕組みを取っている。私はRC22Sociology of Religion（宗教社会学）に所属しており、そのうちの“Religious Engagement and Spiritual Empowerment in Asian Countries: Quest for Human Security and Self-Fulfilment”というセッションに申し込み、発表が認められた。発表タイトルは“Girls Meet Deities: Deities in Japanese Pop Culture”である。日本のポップカルチャーにおける神の表現と神と人間の関係性について、宗教社会学的に分析をした。

学会期間中は、主にRC22Sociology of Religionのセッションを中心に聴講し、議論に参加した。

印象的であったのは、宗教教育のセッションである。日本ではグローバル社会のなかでコンフリクトを生じさせるリスクを減らすために、宗教に関する知識を得ようという宗教文化教育という発想が出てきているが、ヨーロッパなどでは、若者がISなどの過激派組織に入らないために、なにができるのか、という問題意識があり、喫緊の課題として認識されていることがわかった。またボコ・ハラムの教育方法の分析などもあり、日本の学会では聞く機会の得られない貴重な発表であると感じた。

学会会場の近くには、ウィーンの自然史博物館があった。博物館には「ヴィレンドルフのビーナス」として知られる先史時代の女性像がある。大地母神を象ったものではないかと考えられている著名な像で、はじめて実物を熟覧することができ、感激した。しかも360度よく見ることができるように工夫された展示であり、さまざまな角度から吟味できた。思った以上に小さく、また白いこともわかり、勉強になった。

（平藤喜久子）